

はじめに

この本では、「男は感じてないんじゃないのか」ということを書いていく。感じてないから、ミニスカートだの、制服だの、口リコンだの、レイプだのといった妄想にふりまわされることになるのだ。そのことを裏付けるために、私は、自分自身のことをたくさん語ろうと思う。男の性についての一般論ではなくて、実際に自分がどうなのかというところから、この問題を考えていきたいのだ。

男の読者は、自分の身にぐいつと引きつけて読んでほしい。女の読者は、あなたの付き合っている男が、ここに書かれたような心の動きをしているかもしれないという危機感をもって読んでほしい。私も、ここまであけすけに語るわけだから、もう覚悟は決まっている。何もおそれることなく、未知の世界を探求していくつもりだ。

この本ができるまでのいきさつを、すこしだけ述べておきたい。私はミニスカとポルノについて、論文を二本書いて、学会誌に掲載した（日本嗜癖行動学会『アディクシヨンと家族』（第一七巻第四号 二〇〇〇年）日本女性学会『女性学』（第一〇号 二〇〇三年））。専門誌だったので、ごく少数の人しか読んでないか

と思われたが、これが意外な反響を呼び起こした。反響は学界を超え、某局の深夜テレビにて、ミニス力論文の一部分がテロップ付きで朗読されるといふ出来事もおきた。

どうしてこんなに反響があるのか不思議に思っていたのだが、あるとき、ある人が、それは森岡が「私」を主語にして、性のことを語っているからだと言指してくれた。世の中のほとんどの本は、「男はこうだ」とか、「女はこうだ」とかいうふうにして、自分のことを棚に上げて性のことを語っているが、その中で、森岡は「私はこうだ」と恥ずかしげもなく言っている。そこが面白いのである。

なるほど、そうなのかと思った。この指摘は、私を勇気づけてくれた。ならば、「私はこうだ」という姿勢でもって、本を一冊書いてみたらどうだろうか。そうやって完成したのが、この本である。さきほどの二本の論文は、細部を書き直したうえで、それぞれ第一章と第二章に収められている。学者がこんなことを書いていいのか、という思いもある。だがその一方で、学者こそがこういう試みをするべきではないのか、という気もするのだ。

男の性について考えるときに、いまのところもっとも参考になるのは、フェミニズム（女性の視点から社会をよりよいものに変えていくこと。女性学とも言つ）の考え方である。この社会には、

男が女を都合のいいように支配する仕組みが、張りめぐらされている。そして、性についての感じ方や思考回路もまた、その影響を強く受けて作り上げられたというのである。

しかしこの本では、それらの理論をいちいち紹介することはしない。そのかわりに、私自身の考え方や、仮説を、最初からどんどん打ち出していくことにする。いろいろ悩んだ末の決断であるが、やはりこの本の存在意義は、いままでになかったような性の見方を提唱することなのだし、この問題をいろんな角度から考えていくための「きっかけ」を与えることだと思ったからである。

私はこの本の中で、奇妙なことや、常識に反することをたくさん書くけれど、それは私にとっての真実である。そしてそれが、ほんの少しでも読者の心に届くことを祈りたい。(完成稿)